

「水土を守る人々」では、農業や農業用水の役割とこれらが持つ多面的機能等が十全に発揮されていくために、農業水利施設等の維持管理を支える人々の日常にスポットを当てて、その取り組みを紹介することで、農業農村整備や多面的機能の発揮が「人」の支えの上に成り立っていることを伝えていきます。  
※不定期で掲載いたします。

### 大雨から農地・地域を守る!縁の下の力持ち!

あましま なかしままさゆき  
～海部津島水利事務所 管理課課長補佐 中島政幸 氏～ 愛知県津島市

今回「水土を守る人々」で紹介するのは、海部津島水利事務所の管理課で課長補佐を務める中島政幸さんです。海部津島水利事務所（以下「水利事務所」という。）は、愛知県西部の海部地域にある5つの土地改良区（十三沖永悪水土地改良区、蟹江大濰悪水土地改良区、篠田悪水土地改良区、五八悪水土地改良区、宝南悪水土地改良区）の合同事務所で、3市1町（津島市、愛西市、あま市、蟹江町）にまたがる区域を対象として、農業用排水施設の維持管理を行っています。

海部地域はそのほとんどが弥生時代以前には伊勢湾の海の底だった地域で、その後千数百年かけて木曾川によって運ばれてきた土砂が堆積し、江戸時代から明治のはじめにかけて活発に行われた海面干拓により人々が住めるようになった地域です。地形は平らでもともと地面が低かったことと、昭和30年代中頃から工業の発展により急速に進んだ地下水の汲み上げによる地盤沈下の影響もあり現在はいわゆるゼロメートル地帯となっ  
てしまい、河川への排水は全てポンプによる強制排水を余儀なくされています。

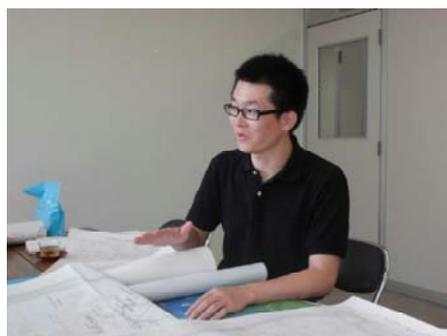


海水面レベル及び地盤沈下量の表示

地域の基幹的な排水河川である日光川の流域内には、大小約170箇所の農業用排水機場が整備されており、国営尾張西部土地改良事業（昭和60年度～平成8年度）により設置された日光川河口排水機場等と一体となって、地域の農地・生命・財産等を守っています。

## 1. 長かった下積み時代

水利事務所では、流域面積約2,800ha、受益面積は田畑合わせて約1,100haを管理区域としており、組合員数は約4,200人です。管理対象施設は排水機場21箇所と排水路約80kmであり、職員12名（技術系6名、事務系6名）と排水機場の運転操作を委託している操作員数名で管理業務を行っています。



海部津島水利事務所 中島課長補佐

中島さんは、日常的には排水機の保守点検や、補修工事等を行うための設計・積算業務に携わっており、地域の排水管理に従事して22年目の大ベテランですが、中島さんの就職後15年間は新規採用者がいなかったため、一番年下としての下積み時代がとても長かったと話してくれました。ただ、様々な上司に付いて回ることで良い経験ができたそうで、その中でも大切にしていることは、排水機場の操作員と日頃からコミュニケーションを取ることだそうです。「地域で「水まわりさん」と呼ばれる方々と会って話す機会を多くとることがこの地域の円滑な排水管理につながる。」と話してくれました。

地域の役員さんとは、3ヶ月に1回役員会で会いますが、実際に最前線の現場で排水機の運転操作を担っている操作員にはこちらから伺わなければ会うことはほとんどないそうで、名簿だけの関係にならないよう常に現場へ足を運ぶようにしているそうです。地区は違いますが中島さんの父親も昔排水機場の操作員をしていたこともあり、年の離れた役員さんや操作員さんとの会話にも苦労はないそうです。若い頃から緊急時には土日も関係なく現場へ駆けつけていた甲斐もあり、今では何かあると中島さんの個人の携帯電話へ直接電話があることが多く、そういう時は頼られている感じがして、とても嬉しいと中島さんは笑顔で話してくれました。

## 2. ゼロメートル地帯での苦労

水利事務所の管内は前述したとおり、そのほとんどがゼロメートル地帯であり、中島さんが務める悪水土地改良区のほか、用水を管理する土地改良区、面整備等を行う土地改良区の合わせて3つの土地改良区が重複して存在しています。（農家は3つの土地改良区へ所属し、賦課金をそれぞれ負担）。この地域は、排水路にもゲートが設置してあり、そこで水位のせき上げを行うことで用水の確保ができるため、雨

が降らない時でも渇水の心配をすることはあまりないそうですが、雨が降るとなると俄然仕事が増えます。特に、大雨の予報がある時は、雨が降る前に地区内の予備排水（※1）を行う必要があるため、それに向けて農家の方にゲートを開けてもらうのですが、排水路の水位が下がると水田の水位も一緒に下がってしまうことや、仮に雨が予報より少なかった場合は、用水の確保に支障がでてしまうため、農家の方はゲートを開けたがらないそうです。また、予備排水が空振りに終わると、排水機の運転費も無駄になってしまうため、もちろんそうならないよう努めてはいますが、絶対に大丈夫ということはないため、そこが難しいと中島さんは話してくれました。

水利事務所では基本的に排水管理を担っており、用水を管理している者の同意がなかなか得られないのが悩みどころのようです。用水管理に手を出すと揉め事になることもあるそうですが、判断が遅れて地域の道路が冠水した苦い経験もあり、できる限り早急な対応を心掛けているそうです。苦勞することもあります。奥様が同じ事務所の元職員で、土地改良区のことや緊急配備等について理解があるため、大変助かり支えになっていると笑顔で話してくれました。



農道路面の冠水状況

（※1）予備排水

大雨が降る前に、愛知県からの要請により日光川河口排水機場からの自然排水が可能な干潮時間にあわせて、事前に排水を行うことで管内の低水位管理を行う。

### 3. 周りからの厚い信頼

上司である稲垣管理課長及び業務上関わりが強い愛知県海部農林水産事務所建設課の新屋課長補佐は中島さんに絶大な信頼を置いています。稲垣課長は「人柄が良く地域に密着しており、特に排水機場の操作員とは密な関係を築いて働いている。緊急時には現場と密に連絡を取り合い、中心となって動いてくれる。また、新人を現場へ連れて行き、言葉だけでなく実際に身をもって教えることもあり、一番頼りになる。」と話します。



中島補佐(左)と稲垣課長(右)

新屋課長補佐は「日頃から現場をよく見ているので、異常があればすぐに発見し、

報告・相談をよくしてくれ、対応も早い。ここは排水機がなければどうしようもない地域なので、生命線を守る意味で頼もしい。また、地元と上手く調整してやってくれている。日頃から地元で溶け込もうとしている姿勢が素晴らしい。」と話してくれました。



若手へのノウハウ伝承

#### 4. 今後の展望について

中島さんは今後、県等と協力して地域での排水管理に関する啓発活動を行ってきたいと話します。管内では、昭和34年の伊勢湾台風をはじめ、数多くの台風などによる災害をたびたび経験しているが、昭和51年9月の集中豪雨を最後に大きな被害は起きていません。そのため、災害が起こらないことが当たり前になっており、地域住民の災害に備える気持ちが薄くなっているとともに、排水機への関心も薄れ、排水管理を誰が行っているのかが認知されていないのが現状です。

中島さんは、よく排水機場の近くを散歩している人にこれは何かと聞かれることがあるそうですが、「ゼロメートル地帯という言葉は知っていても、その意味を理解されていないと感じている。」と話します。5年ほど前から県主催でゼロメートル地帯のことやこの地域を支える縁の下の力持ちである排水機場のことを知ってもらうため、地域の小学校約10校の4年生を対象に現地学習会を行っています。しかし一方で、地域住民に対しては、工事前には何度か説明会を行いました。完成後は行っておらず、排水機場の竣工式に住民を呼ぶこともなかったとのこと。



小学生を対象とした現地学習会

最後に中島さんは「自分達が管理している排水施設は、地域の農業や農地だけでなく、住民の命や財産も守っている。しかし、地域住民は災害がなくて当たり前と思っており、土地改良区の役割はあまり理解されていないのが現状です。これからはこのことをしっかり伝えていくために、地域住民を対象とした説明会を行うなど啓発活動を行っていきたい。」と今後の展望について話してくれました。

【東海農政局農村振興部設計課事業調整室、農村振興局設計課】